

切磋琢磨しながら良い作品を作りたいと励んでいます。

南

丹市を『ものづくりのまち』にするために大事なことは、特にプロの作り手個々の意識だと思えます。都会に出て行つての宣伝活動も大事ですが、根本的には『ものの力』にかかっていると思います。『ものの力』は自己責任であつて、美山のような不便なところで活動しているから売れないなどと言ひ訳するのではなく、そんな不便なところに、わざわざ行つてまでも見てみたい、欲しい、と思わせるだけのものづくりを私たちがしなければなりません。それができてやつと『ものづくりのまち』になるのではないでしょう。

徒

弟制度がほぼ崩壊した現在では、伝統技術をどのようにな承していくかという課題があります。全国的に職業訓練校も少なくなつていゝ中で、私が木工という世界で生かしてもらつていゝことに感謝し、技術を学ぶだけでなく、自分のできる範囲で後輩に技術を伝えていくこともこれからの私の役目だと思つています。また、伝統を守り、残しつつも新しいものを取り入れ、伝統工芸の世界に新たな風を吹かせたいです。



陶芸 長元 宏さん(日吉町)

日吉町胡麻の陶房「宏」で皿や器、コーヒーカップなどの食器を制作。京都市内の陶器店を中心に品物を納める。ピアカップは例年売り切れる人気商品。

小

さいころからものを作るのが好きでしたが、ものづくりの仕事をしたよと思つたのは高校を卒業するとき。京都府立陶工高等技術専門校で2年間ろくろの基礎技術を学びました。卒業後は亀岡の陶芸家に師事し修行。1年後、清水焼の煎茶道具を作る工房に就職し、急須や煎茶湯のみなどを作るろくろ師として15年間働きました。

煎茶湯のみの特徴は、6客1組の湯のみをすべて同じように作らなければいけないこと。形や厚みなど、見本の寸法を調べながら寸分の狂いなく、手作業で器を作りました。

工

房で働きながら、独立を考へ、子どもの小学校入学を契機に移住先を探してたまたま訪れたのが日吉でした。自然環境が良く、樹木園のある胡麻郷小学校に衝撃を受け、胡麻に工房を設けました。日吉は時間の流れも穏やかで、夏は工房の窓を開けて作業します。広い空や緑豊かな山を眺め、自然を感じながら気持ち良く仕事ができます。人が少なく寂しいと感じることもありませんが、都会にはないリラックスできる環境です。

私

の作る品物の特徴は見た目よりも軽いこと。物を入れたり、盛り付けたときの使いやすさを第一に考え、強度を保ちつつ肉厚を薄く仕上げています。そして、私が一番こだわっているのは

